
黒龍の誓

函南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒龍の誓

【Nコード】

N0142Q

【作者名】

函南

【あらすじ】

平々凡々な高校生活が幕を開けて、漸く一週間が経とうかというとき。そんな智樹の運命を変えたのは、突然目の前に現れた黒塗りの車。

タイミングよく、智樹が通りかかった瞬間に出てきた男は「高橋智樹くんだね?」とどこか確信を帯びた口調で智樹に詰め寄った。勿論、「そうです」なんて怪しい男に素直に答えるはずもなかったが、逃げる術もない。そんな智樹が男の威圧にやられ高級そうな車に乗り込んだ日から、智樹の運命は大きく変わった。

華の高校生、夢の高校生活が始まってすぐのことだ。

平々凡々、ゆつくりと変わらぬまま進んでいくのだろぅと思って
いた自分の生活が変わった。

目の前には黒塗りの車。以前テレビで見たことあるぞ、こんな高級車、と思ったら車の扉が開いた。

まるで自分を待っていたようだ。と馬鹿なことを考えながらも、早くここから動かないとなにか厄介なことに巻き込まれそうな気がするぞと智樹ともきは無い頭を働かせてどうにか動こうと足を一歩進ませた。

しかし、その行動は一步どころか十歩ほど遅かったのではないだろぅか。

「高橋智樹くんたかはしともきだね？」

目の前の黒塗り高級車から出てきたオールバックの、それなりに整った顔の男は、呆然と立ち尽くす俺に向かってそう問いを投げかけた。

男の服装はぴっちりした黒スーツ。ネクタイは紫と黄緑が自然な感じで交わりあっており、どこか高級感をかもし出している。がちりした体格、一応百七十はある智樹の身長を越し、見下ろせるだけの体躯。パーツパーツまでもが整っている顔を見るのも恐ろしい。先ほど、あの切れ長の鋭い瞳と目が合ってから体が竦んでいるほどだ。

——高橋智樹、十六歳。平凡なはずの高校生活を始めてまだ

一週間も経っていないのに、なぜだか平凡な生活を送れない気がしてきた。

これはいけない、どうにかして逃げなければ。

「い、いえ！ 人違いだと思います！ 智樹くんなら……」

智樹は焦り、どもりながらも人違いだと告げてみる。そして「智樹くんならまだ教室にいた」とでも答えてこの怪しげな男から逃げてしまおうと思っていたのに。

「高橋智樹くんはこの学校には二人いるんだろうか。私が持っているこの写真の高橋智樹と、君の顔は全く同じに見えるんだけど」

につこり、そういった擬音がつきそうな笑顔で男は写真を見せてきた。撮影した覚えの無い写真だ、それにどこか明後日の方向に視線がいつているし。これはもしかして、もしかしなくても——盗撮という奴ではなからうか。

はじき出された答えにさあつと血の気が失われていくのがわかる。そして、盗撮だということがわかったところで、目の前の写真にはしっかりと智樹の顔が写されている。毎日歯磨きをするたびに見る、自分の顔が。

「き、きつとその、その写真を撮った人が間違っただですよ！ それに、本物の智樹くんはもっと格好いいです！」

どこからその写真を入手したのか、というのは恐ろしくて問うことなどできない。だから智樹は舌を噛みながらも「高橋智樹」という人間はもっと格好いいとアピールをし、人違いだからで逃げようとした。

が、そんなに現実には甘くない。

「そうかい。なら申し訳ないことをしたね」

「い、いえっ、お構いなく」

「これでは私の気がすまない、お詫びをしたいからこのままお茶でもどうだろうか。さあ、乗って」

「だっ、大丈夫です！ 本当にお構いなく！！」

何故こんなことになっているのだ。自分と同じく下校していく学生たちは不思議そうな、それでも黒塗りの怪しい車に脅え、同情的な視線を送ってくる。こんなことになるならば、ゲームを買いに行くからというつまらない理由で友人と一緒に帰る約束を反故にしなければよかった。智樹は心底十分ほど前の自分を憎んだ。

「いや、乗ってくれないと私の気が治まらないんだ」

自分がこのような輩に絡まれる理由など一つも心当たりなどないのに、こういった自体に陥っているのは何故か。智樹は目の前の男がどのような目的で自分に近づいているのかと思うと、恐ろしくて仕方がない。

この男は、どうやってでも自分をどこかに連れて行きたいらしい。自転車ならば断る理由もあったというのに。

「い、いえ、あの、本当に……」

おかまいなく、といったかったのだが、あとの言葉は声にならなかった。

「——時間がないんだ。いいから乗れ」

先ほどまではやはり見せ掛けだけでも優しくしてくれていたようだが、どうやら堪忍袋の緒が切れたらしい。

智樹は比べ物にならないほどの恐怖に負け、男に背中を押されるようにして車の中に体を入れた。

「いやあ、先ほどは手荒な真似をしてしまいすまなかったと思っている。悪かったね、智樹君」

僕は高橋智樹じゃないです、ということを諦めることにする。

こうやって未だに智樹くんと呼んでくるあたり、どうやら俺が高橋智樹だと確信できる材料は揃っているようなので。散々意地を張っとしてなんだが、やはり無駄な抵抗だった気がするの俺だけだろうか。

「いや、あの、ほんと、気にしないでください」

力ない声はぼろぼろと下に落ちていくだけだ。隣に座った男に聞こえているのかは定かではないが、自分に気にする義理などないのだ。

「そうかい？ それなら良いんだが」

聞こえているらしいので言いなおす必要も気にする必要もないことがわかった。今のところ別のことが気になって頭が一杯なので、元から気にとることなどできなかったであろうが。

こうやって丁寧な話され、丁寧な扱いを受けていると忘れそうになるが、この男は先ほど泣く子が黙るところか、失禁してしまうような声で俺を脅したのである。忘れたように丁寧な口調で喋っているが、いや、別にこんなことはそれほど気にならない。この男が話しやすいように話せばいいのだ。自分には一切関係のないことなのだから。

「智樹くんは今年高校一年生になったばかりなんだよね」

そうです、とまた弱弱しく返す。

そろそろ会話をすることを望んでいないのだと悟って欲しい。

今智樹が一番気になっていることは、この車の向かう先である。

運転手をしているお兄さん——おじさんというと殴られる気がする——は、俺と男が乗ってすぐ車を走らせた。男は行き先を喋っていない。もとから信じてなどいなかったが、やはりお茶を飲むだけではすまないようである。

妙に座り心地のいい座席も、ごつごつとした指輪を沢山指につけ運転する男も、助手席に座ってサングラスをかけたまま喋らない男も、隣でたまに沈黙を作らないためか話しかけてくる男も、皆が気になる。自分の頭の要領は一杯だというのに、まだそれでも新たな不安が頭を埋める。

そうやって俯いて不安に駆られている智樹をどう思ったのか、隣に座る男が明るいめの声を出して望んでいないことを告げた。

「そうだね、緊張してるみたいだから、自己紹介でもしようか」

「じ、こしょうかい」

「そうそう、自己紹介」

必要ない。というかお断りしたい。これ以上こんな車に乗る、高そうなものを身に付けている危なそうな人たちと関わりたくない。ここで自己紹介をするなどと告げてきたということは殺されるわけではなさそうだが、開放されてもまた関わってくるかもしれないという恐怖には勝てそうもない。

「先ほどは見苦しい姿を見せてすまなかったね、私は松本修也まつもとしゅうやというものだ。本来はもう少し優しい大人だから安心して構わな
い」

「は、はあ」

無理無理、安心するとか絶対無理。どの口がそんな言葉を、思っても発しはしない。怖いから。

「ついでに紹介しておくと、運転しているのが莊子そうし、見えるかはわからないんだけど、助手席にいるのが一成かずなりだよ。無愛想だが、話し

かければ返してくれるから好きに話しかけると良い」

「……はい」

絶対ない。自分から話しかけるとか絶対無い。

というか自己紹介とかいいながら名前しか名乗ってないし。本名かもわからないし、素性は全くしれないまま。こんなので自己紹介って言うのか。

智樹は胸中だけで呆れ、表情には出さないようにつとめながらおずおずと顔を上げる。

これくらいなら答えてくれるかもしれない、と思い松本に質問してみようと思ったのだ。

「あ、あの……、松本さん」

「なんだい？」

急に話しかけた俺に驚いた様子だが、笑顔で応答する松本はやはり大人の男で、格好いい。この状況でなければ憧れを抱いていただろうと思うほどだ。

「今、何時くらい、ですかね？」

門限はそれほど遅くも無いし、いつも寄り道もせず帰っているの
で、もしかすると母さんが心配するかもしれないと思ったのだ。

五体満足で帰ることができるかといえば難しいと答えるしかない
が、希望を持つくらいなら許されるだろう。

別に制服のポケットに入れている自身の携帯を取り出し確認しても良かった。だが、開いた瞬間に取り上げられてしまうことも考えられたのだ。

「時間？」

松本は智樹に確認するように告げる。智樹がその言葉に一拍遅れながら頷くと、松本は口調を変えず一成を呼んだ。

「今何時だ」

「……今は、四時半ですね」

初めて一成の声を聞いた。いや、初めから松本さんしか喋ってなかったんだけどね。

「四時半だそうだけど、智樹くんは何か用事があるのかい？」

「い、いえ。よ、用事というほど、では」

六時すぎたら門限なんですとって逃がしてもらえないだろうか、とか別に考えてないです。それにしても、四時半、とは先ほどから全然時間が経っていないじゃないか！ 嫌な時間ほどゆっくり過ぎるという言葉はどうやら本当らしい。

「そう？　ならいいんだけど」

深くは追求しようとしないうちにこの男の考えていることも怖い、追及されなかった良かったです。

智樹がばれないように小さくため息をつき、またもや小さくなって俯いた瞬間、声を聞いてない最後の一人、莊子が口を開いた。

「松本さん、あと二分ほどで到着します」

莊子が到着まであと数分だと告げたが、松本はそれに返事をしない。先ほどまでの智樹ならやはり松本だけは書くが違うのだなとびくびくしていたところだろうが、生憎今の智樹莊子の言葉で頭が一杯なのである。

——あと、二分ほどで到着う！？

どこについてしまうのか。ついに湾デビューを果たしてしまうのか。それとも、魚の餌に……。どちらにしろ門限を過ぎる頃には俺の命はないのだろう。

智樹は今度こそ諦めよう、と小さく息を吐く。

俺は魚、俺は魚、と検討違いのことをずっと考えていたら、車が停止した。ゆっくりだった、衝撃が全然ないように感じられたのはやはり高級車だからなのかと、少しだけ違うことを考えた。

智樹はこのまま扉を開けて走り出せば逃げられるのではないだろうか、とも考えたが、その考えはすぐに一蹴された。一成の行動により。一成は少し体を動かした際に、胸元からなにか黒い物体を落とした。智樹はその物体が何なのか見えなかったのが、危険なものであるということは天性の勘で確信していた。勿論、その勘どおり危険なものであった。なんでもないことのように一成が持ち上げたのは、真っ黒で、光があたりと少しかする掌より少し大きいソレ。所謂、拳銃という奴である。

ギャー！

智樹は心中だけで叫んだ。

何故そんな危ないものを胸元に！ いややっぱりヤのつく職業の方だから当然なのか！

なんでもいいが、やっぱり智樹は家に帰りたかった。

しかし逃げられるわけもなく、誰よりも先に下りた一成が松本の座席の近くのドアを開く。やはり松本さんは格が違うんだな、とこの状況が全くの他人ごとのような目でその行動を見つめていた。

が、松本はそんな智樹に向かって、にっこり笑う。またもやはたらく勘が訴える。「これは良くないことが起こるぞ！ 逃げろ！」と。逃げられないから怯えることしか出来ない。

「さあ智樹君、ついたよ降りて」

拒否はできないからな、という顔に、こちらもこの車にもいたくないので、渋々、ゆっくり降りてみる。

「……」

ここ、知ってる。

外なんて見えなかったからどのようなルートでここに来たのかはわからない。だから当然帰れないような知らない場所に連れて行かれるのだろうと思っていたのに、目の前にある建物を智樹は知っていた。

しかし、だからといって安心できるわけでも、なかった。

「ここにね、智樹くんに用事があるっていう方がいるんだ」

「ゝ方」といういい方に松本の更に上なのだと知り、絶望。

そりゃあ、この、大豪邸だから、な。

家からは大分遠い場所だが認知していたこの場所。その理由は至極単純で、この目の前にある建物が有名だからである。

「やっさんの家」とふざけて友人が呼んでいたのを思い出す。

まさしくこの豪邸は「ヤのつく職業の方が住む家」のようである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0142q/>

黒龍の誓

2011年1月13日18時10分発行